

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第443号 平成24年11月27日

ゲルニカ

今月（11月）に入って突然始まった、イスラエルとパレスチナ自治区のガザを
実効支配しているハマスとの間の戦闘が、8日目にして停戦が成立する事になりま
した。

停戦交渉には、「アラブの春」によって誕生したエジプトのムルシ政権が大きな役
割を果たしたようです。

まずは、双方の市民に平穏が訪れた事を歓迎しますが、この間、パレスチナ側
には死者が少なくとも160人以上、負傷者も1200人以上と大きな被害が出てお
り、一方のイスラエル側にも5人の死者が出ている事を忘れるべきではありません。

この地は、イスラエルの建国以来、どれほど多くの血が流された事でしょうか。

イスラエルの建国に当たって、中東が、欧米列国の様々な思惑の中に翻弄されて
来た歴史があります。当然、イスラエルにはイスラエルが主張する正義があり、パ
レスチナにもパレスチナが主張する正義がありますが、しかし、如何なる理由をつ
けようとも、人々の命を犠牲にして成立する正義など、認める訳にはいきません。
同時に、今回の停戦が、永続的な平和に結びつくよう、心から期待しています。

さて、中東には、いまだに国内で戦火が収まっていない国があります。それは、
昨年3月以来、政府軍と反政府側との戦闘が内戦状態となっているシリアです。
21日には、北部の商業都市アレッポで、負傷者らを収容していた病院が政府軍に
空爆され、少なくとも40人が死亡したとの報道もありますが、在英人権団体の「シ
リア人権監視団」によると、既にシリアでの死者は4万人を超えており、その内の
7割は民間人である事を明らかにしています。

シリアの内戦がこれ程多くの被害を出しながら、なお事態解決への道のりは簡単
ではありません。シリアを取巻く国際社会の意思が、シリア政府を支援する力と反
政府勢力を支援する力に分散されている事に加え、反政府勢力も一つにまとまって
いないという複雑な事情が垣間見えますが、そうしている間にも犠牲は増え続けて
います。

シリア政府からすると、反政府勢力は武力で鎮圧するしかないと判断しているの
かも知れませんが、一国の政府が、自国民に対して銃口を向け、爆弾を落とすとい
う行為は、決して許容できる事ではありません。

今から75年前（1937年4月）の事になりますが、スペインの内戦中、フランコ将軍を支援するナチスの空軍によりバスク地方の小都市への無差別爆撃が行われました。

爆撃を受けた都市の名は「ゲルニカ」といいますが、パリに滞在していたピカソは、この爆撃への抗議の意思を込めて約2か月で書き上げたのが、不朽の名作「ゲルニカ」です。



PABLO PICASSO
Guernica, 1937

「ゲルニカ」は、多彩色で描かれる可能性もあったという事ですが、それをモノクロームで描いた意味について国学院大学の宮下教授は「モノクロームの巨大な壁画は、ゲルニカの悲劇がゲルニカのみにとどまるものではなく、いつどこで起こってもおかしくない、そのような不気味なリアリティを物語っている。殺人事件の現場などの映像で、死体から流れる血が、カラーで表現されるより、モノクロームで表現された方が場合によってははるかに生々しく、惨酷で、空恐ろしく見えるのにそれは似ている。こうして「ゲルニカ」は、戦争の悲惨さを、ゲルニカの悲劇としてのみ問題化するのではなく、人類全体への、ヒューマニズムに対する攻撃とし表現することができたのだ。（宮下誠著「ゲルニカ―ピカソが描いた不安と予感」から）」と述べています。

「ゲルニカ」が描かれた当時、この絵は、これを見た多くの人々に衝撃を与えたといわれていますが、しかしその後も、人類は悲惨な世界大戦を経験し、21世紀に入った今日においても、地球上では戦火の止む気配がありません。

ピカソの告発は、現実の国際政治の力学の前には無力のようにも見えますが、しかしだからこそ、私たちは「ゲルニカ」の発し続けている声にもっと耳を傾けるべきだと思います。混沌の世界から抜け出すためにも。（塾頭：吉田 洋一）